

グループ・ディダクティカ 著

『深い学びを紡ぎだす
教科と子どもの視点から』

勁草書房、2019 年 1 月

288 頁、2,500 円（税別）

「3つめのピースがそろった」、そう感じさせる待望の本である。

戦後最大と言われる教育改革において求められる教育は、21世紀で必要とされる「資質・能力」（本書は知識、スキル、態度・価値観を「資質・能力」の三本柱とする）を身につけることを目標とするが、そこでの学びは「主体的・対話的で深い学び」という視点から見て不十分でないようにしなければならない。

そもそも「主体的・対話的で深い学び」なる言葉は、すでに広く認識されている「アクティブラーニング」に代わって指導要領に登場(2017年2月)した。「主体的・対話的」と並列的に結ばれた2つの要素は、もともとの「アクティブラーニング」に対応するうえ目に見える活動として捉えやすかった(もちろんそこに陥穽もある)。ところが「アクティブラーニング」が認知され自明化されていけばいくほど、単独で切り離せないはずの「深い学び」が等閑に付されるようになってはいないだろうか。あるいは「アクティブラーニング」を実践していれば自動的に実現されるおまけのようなものとして済ませて来なかつたらどうか。しか

しアクティブに知識、スキル、態度・価値観を教えるということが実現すると、これまでの知識偏重教育が装いを変えて強化される危険性が再び訪れる。そうならないために必要なのがまさに「深い学び」ではないか、本書はそう問いかけるのである。

本書が「深い学び」を提示する方法は、新たな理論を打ち立てるのではなく、各教科におけるこれまで教育実践や理論の歴史の中に埋まっている「深い学び」を見出し、それを掘り起こして「主体的・対話的で深い学び」へと紡ぎだすというものである。

第□部では国語、社会、体育、道徳、総合的な学習、それぞれの教科がもつ視点に沿った具体的な学びの深まりが紹介される。すなわち他人ごとで個別的な学びが、我がものとされ活用可能にされる過程が示されている。第□部では「主体的・対話的で深い学び」という視点自体が反省され深められ、第□部ではこれから必須になるカリキュラム・マネジメントが論じられる。ここでもやはり、単なる理論の紹介ではなく具体的実践に即した議論がなされており、生徒の変化から「深い学び」を見取ろうとする執筆陣の一貫した態度が表れている。本書を通して、読者も「主体的・対話的で深い学び」に取り組む存在として紡がれていくのを心強く感じるだろう。

古賀裕也（かえつ有明中・高等学校）